



国語科の学習において「主体的・対話的で深い学び」を目指すとき、教材を理解することだけではなく、日常生活に生きて働く言語能力を身に付けることが求められるのではないだろうか。例えば、物語の読み取りでは、ただストーリーをつかむだけではなく、その登場人物の相互関係や心情、場面や主題に至るまで、読み取ったことの関係性を多く見付け出し、言語を手掛かりにしながら豊かに想像する力が必要だと考える。このような深い学びを進めていくために、質の高い「学び合い」の授業を行うことが大切だと考えられる。

POINT
1

学習の目的や意図を 明確にし、見通しをもち、 学びへの意欲を高める工夫

「学び合い」を行うためには、まず、子どもたちが自己の考えをもち、それを積極的に表現し合えることが大切であろう。しかし、実際の授業では、発言者が限られてしまったり、個々の考えが心の中にとどまり発言されなかったりすることも少なくないのではないだろうか。

原因は様々考えられると思うが、その一つに子どもが自信のなさを感じているのではないだろうか。そこで、学習のねらいや目的を共有できるように、学習過程の提示の仕方を工夫してみてはいかがだろうか。

例えば、5学年の「『図書すいせん会』をしよう」では、誰もが知る簡単な絵本を、映画の予告版のような動画に編集し提示してみた。子どもたちは、どの絵本か真剣に考えるとともに、「目的に応じて簡単に書く」ことや「事実と感想などを区別して伝える」こと、「内容に応じて伝える方法を工夫する」ことといった学習の目

的を、複雑な説明なく導入段階で把握することができた。それにより、その後の意欲的・主体的な取組につながったと考えられる。高学年であれば、グラフィック・シラバスの提示によって学習過程を把握することも可能であるが、動画や音声を駆使した映像の提示は、YouTubeなどに慣れ親しんだ今の子どもたちの意欲を高めるに有効な手立てであると考えられる。

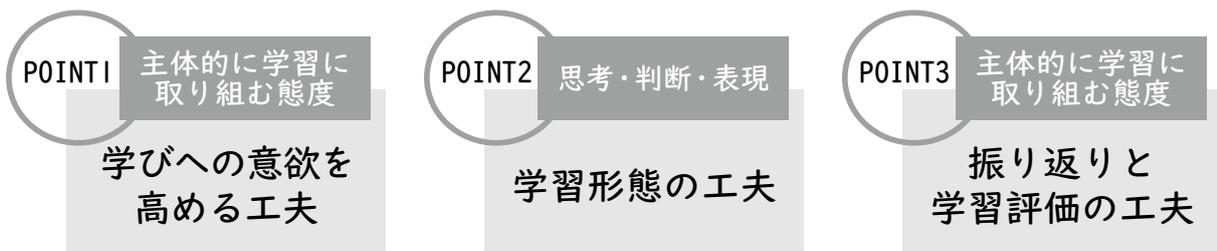
何をすればよいか明確になったとき、子どもは自信をもって学習活動に取り組むことができるであろう。学習のスタートとゴールをしっかりと共有することが、子どもの意欲を引き出し、自信をもって考える姿につながると考えられる。

POINT
2

多様な考え方と出会い、 考えを深める学習形態の 工夫

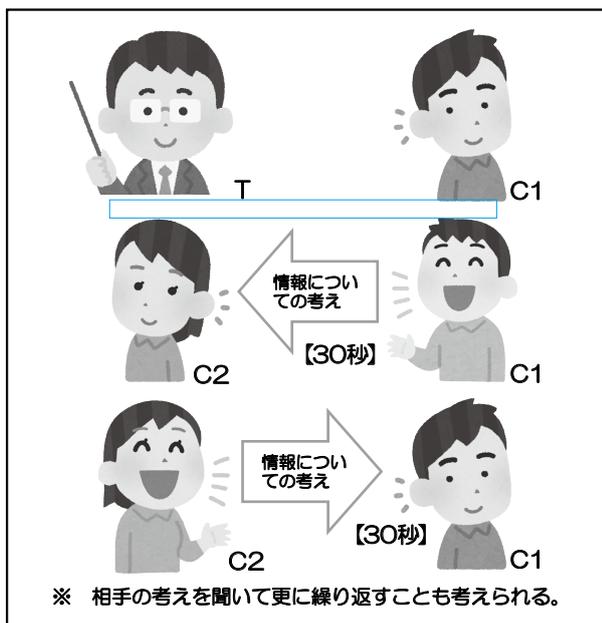
「学び合い」の授業を成立させるためには、対話的な学びが必要であり、全ての子どもが主体的に対話に参加することが大切であると考えられる。そして、質の高い対話を行うためには、ペア学習やグループ学習など、学習形態の工夫が有効であろう。しかし、一単位時間の中で設定できる時間が限られていたり、グループ学習に適した課題、適さない課題が教材に混在していたり、活動が子どもたちの経験や発達段階に左右されたりすることも考えられる。さらに、グループ編成や時間設定、進行方法の指導など計画に時間も掛かることから、学習活動に意図的に位置づけることが難しいことも多いのではないだろうか。

そこで、短時間で対話的な学びを成立させるエクササイズ「タイムペアシェア」を取り入れてみてはいかがだろうか。



- 最初に教師が一定の情報を伝える。
「まず、最初の一人が30秒、次にもう一人が30秒、それぞれ自分の考えを話す」など、交流時間を明確に指示する。
- 与えられた情報に対して、ペアになり互いの考えの交流を行う。
相手の話を聞いた後、深化した自分の考えを更に30秒話す。
また、他の子とペアで話したことを、別の相手とシェアトークするなど、発展的な活動が考えられる。

これだけのシンプルな活動であるため、学習活動に取り入れることは比較的容易であると思われる。状況や目的を考えて学習に取り入れ、活動を繰り返すことで、対話を通して自分の考えが相手のどの言葉を受けてどう深化したかを考え、それをできるだけ自分の言葉で話そうとする力が育っていくものと考えられる。



【タイムペアシェア活動のイメージ】

POINT 3 ルーブリックを活用した効果的な振り返りと学習評価の工夫

対話的な学びやグループ学習において、その活動を全て見取り、評価することは難しいのではないだろうか。評価が曖昧であると、子どもたちは学習活動をどのように改善すればよいのか分からず、振り返りも学習方法などの分かりやすいものに偏ってしまうことも考えられる。

そこで、ルーブリックを活用した振り返りで指導と評価の一体化を図ってみてはいかがだろうか。ルーブリックとは、子どもの学習到達状況を明確に評価するための基準であり、それを教師と子どもたちが共有することで、子どもの学習段階、力を伸ばすために必要な支援や活動が可視化される。あとどれくらい頑張れば次の段階に進めるか、子ども自身が学習を振り返ることが可能なため、自分の成長の度合いを実感でき、意欲的に学習に取り組む姿につながると考えられる。また、教師は、その自己評価を用いて総合的に評価を行うことが可能となり、目標と評価が明確に対応することで、より効果的な学習活動を行うことが可能となるであろう。

	評価項目1	評価項目2	評価項目3
S	1-S	2-S	3-S
A	1-A	2-A	3-A
B	1-B	2-B	3-B
C	1-C	2-C	3-C

到達レベル

【ルーブリックのイメージ】



POINT
1

ICTを活用し「つないで」覚える

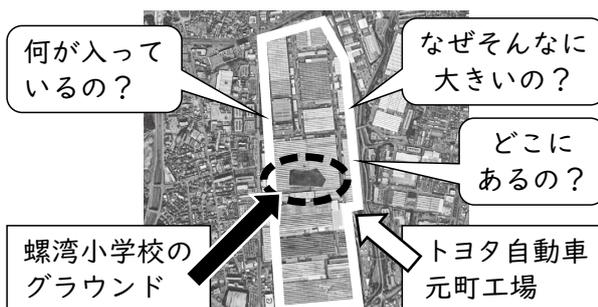
1 ICT機器の活用

習得した知識や技能を活用して、思考、判断、表現するためには、十分な知識及び技能が必要であろう。限られた授業時数の中で「いかに効率よく基礎的な情報をインプットするか」を考えるならば、ICT機器をフル活用していきたい。実践しているアイデアはたくさんあるが、始めやすいのは Google Earth の活用であろう。

2 Google Earth で視覚に訴える

5 学年の学習は、日本の国土・農業・水産業・工業・情報・環境について学ぶが、中でも地理的な知識がとても重要であると考えます。Google Earth を活用し、国などの名称・位置関係を確かめたり、校庭・通学路など身近なものとの比較をしたりすることで、知識及び技能の定着と関心・意欲を高めることができるであろう。

例えば、下図にあるように、自校のグラウンドの広さを計測し、自動車工場との比較をする。すると、いろいろな疑問が湧いてくると思われる。この工場がどこにあるのかも知りたくなるので、今度はこの工場を探したくなるであろう。



【トヨタ自動車元町工場と螺湾小学校グラウンド】

3 「ツアー」を作成し、目的地に迫る

Google Earth では、「ツアー」を作成できる。各ポイントを設定し、順番に巡っていく。自動車工場に着くまでに、地球→日本→中部地方→愛知県→豊田市と、段階的にアップにしていく。その過程で、大きな工場がいくつもあることや高速道路があることなどを見付けることができるであろう。ストリートビューを使うのも面白いと思われる。

4 子ども自身が自由に触れる

端末操作は教師から提示することもできるが、1人1台の端末が整備されつつある今、子ども自身も操作することができる。むしろ、どんどん取り組ませたい。投稿された写真も見ることができ、周囲の様子を知ることができることも、知識を「つなぐ」ことになるであろう。

+α 共有する

その他、私の作成した「ツアー」には、

- ・日本の端はどこ？ツアー
- ・日本の水揚げトップ3漁港ツアー
- ・太平洋ベルトツアー

など数十個ある。前述した自動車工場のツアーも含めて試してみたい方は、Google Drive のアプリをダウンロードした上で、以下のQRコードにアクセスし、Google Earth のプロジェクトから「ツアー」を開くと見ることができる。



POINT1

知識・技能

ICTでつなぐ

POINT2

思考・判断・表現

資料を使って
アウトプットする

POINT
2

「はがき新聞」で アウトプット

1 「はがき新聞」という方法

まとめ方にも、いろいろな方法がある。限られた授業時数の中で、効果的に評価するためのアイデアを紹介する。

新聞にまとめる、プレゼンテーションソフトを使ってまとめるなどの方法は多くの実践がある。しかし、どうしても時間が掛かりすぎる、作成の分量が多く、個人差が大きくなりやすいなどの課題があると思われる。

そこで、「はがき新聞」を取り入れてみてはどうだろうか。はがきサイズの新聞用紙を用いるので、文章量が少ない。むしろ、子どもはもっと書きたいと思うであろう。しかし、「内容を絞らざるを得ない」「資料も1～2つ程度」という制限が、子どもの思考を活発にするのではないだろうか。

2 「はがき新聞」の実施にあたって

(1) ルール

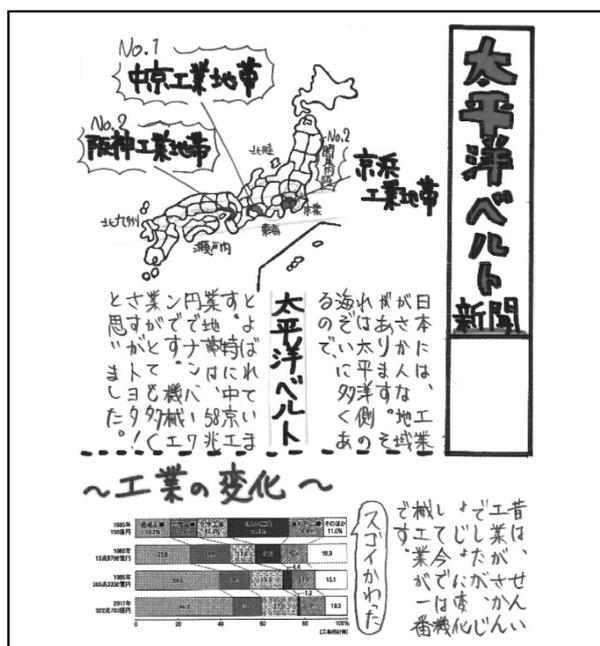
- ① 資料（写真・図・表・グラフなど、教科書や資料集のもの）を必ず用いる。
- ② 資料と関連づけた上で、分かったこと、考えたこと、疑問などを明確にして書く。そのほかは、子どもの創意工夫に任せる。

(2) 実施時期

私の場合、単元の最後に1時間設定することもあるが、単元テストと同時に行うことが多い。「何をメインにして書こうか」と考えることで、復習にもなると考えるからである。始めは難しいかもしれないが、右記作成例を

見れば分かる通り、資料を付けると記入する分量はそれほど多くないので、テスト後でも取り組むことができる。

各町村の導入状況にもよるが、1人1台ある端末で作成することも可能であろう。キーボード入力のスキルがあれば、より短時間で作ることができると思う。また、資料を載せるのも簡単であろう。



【「はがき新聞」の作成例】

3 用紙について

「はがき新聞」については、公益財団法人 理想教育財団が物品助成を行っている。

(<https://www.riso-ef.or.jp/index.html>)

「はがき新聞」の実践事例集などもあり、大変参考になる。ホームページを参照していただきたい。

教科横断的な学習という観点からも、有効な方法と思われる。試してみたいはかがだろうか。

POINT
1既習事項をつなぎ、説明する
活動を通して、知識及び技能の
定着を図る指導の工夫

知識及び技能の確実な習得は、算数科の学習を進める上で欠かせないことの1つであろう。

しかし、意味を踏まえないまま、ただ単に公式などを暗記させたり、計算を速く処理できることのみを技能として求めたりする形式的な学習指導では不十分であろう。習得した知識及び技能を、公式や計算の仕方の背景にある概念や性質の理解を深めることにより、その知識及び技能は生きて働くものとなるであろう。

下に掲載した写真は、「体積の求め方のくふう」の授業の板書である。子どもたちは前時までに、「直方体の体積＝たて×横×高さ」「立方体の体積＝1辺×1辺×1辺」の2つの公式を学習している。しかしながら、例題の立体は直方体でも立方体でもない。この立体の体積を求

めるためには、「体積を増やしてからひく」「縦又は横に分割して2つに分けて求める」ことで、既習の公式を活用できるようにする必要がある。この単元では、以下のような指導の工夫が考えられるのではないだろうか。

- ・オリジナルネーミング（板書写真参照）
- ・式をよむ
→式だけを発表し、どこで切ったのかを考える。
- ・操作をよむ
→どこで切ったのかなど、どのように操作したのかだけを発表し、式を考える。

これらの指導の工夫をすることで、でこぼこした形であっても公式が使えることを実感し、既習事項である知識及び技能が定着することにつながっていくと考える。

直方体でも立方体でもないよ。でこぼこ体の体積はどうやって求めよう？

既習の知識をつなぎ
知識及び技能の定着を図る

直方体や立方体の公式の考えを使うと、体積を求めることができる！

でこぼこ体の体積を求めよう。

つけひき方式
 $8 \times 9 \times 6 = 432$
 $8 \times 5 \times 2 = 80$
 $432 - 80 = 352$
 答え 352 cm^3

上下分割方式
 $8 \times 4 \times 2 = 64$
 $8 \times 9 \times 4 = 288$
 $64 + 288 = 352$
 答え 352 cm^3

左右分割方式
 $8 \times 5 \times 4 = 160$
 $8 \times 4 \times 6 = 192$
 $160 + 192 = 352$
 答え 352 cm^3

【既習の直方体と立方体の公式を活用して、知識及び技能をより確かなものとする授業の板書例】

POINT1

知識・技能

知識及び技能の定着を
図る指導の工夫

POINT2

主体的に学習に
取り組む態度

導入の工夫と
振り返りの充実

POINT
2

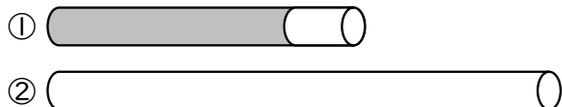
「ズレ」のある導入と
単元末での振り返りで、
意欲や自信を高める

5学年の算数科の学習は、それまでの学年に比べて、より高度で抽象的な思考が必要であると言われている。そのため、子どもたちの学習への取り組み方の個人差が大きくなる傾向が予想される。学習への意欲や自信を高め、学びに向かう力、人間性等を育むためには、大きく2つの取組が効果的であると考えられる。

1 「ズレ」のある導入

導入場面においては、子どもたちが「やってみたい!」「楽しそう!」などと思えるような、「主体的な学び」を引き出すことが大切であろう。特に、友達の考えや自分の予想との「ズレ」を感じさせることが、ポイントになると思われる。

下は、割合の単元での導入例である。



①のパイプの全体の長さは15mで、色をぬった部分の長さは12mです。②のパイプの全体の長さは20mです。

①のパイプと同じ割合で色をぬるには、②のパイプを何mぬればいいでしょう。

【予想】

Aさん「15-12で3m差だから、②も20-3で17mじゃないかな」

Bさん「でも、100mのパイプだったら、97mもぬることになるな…」

【「割合の単元」での導入例】

この導入では、Aさんのようにひき算で考えるという子も多いであろう。しかし、Bさんの考えが出てくると、Aさんの予想が正しくないのかもしれないという「ズレ」に気付くと思われる。そして、そのどちらが正しいのかについて「知りたい!」という気持ちが生まれ、学習意欲が高まっていくのではないだろうか。

2 振り返りの充実

また、学習に対しての自信をもつためには、振り返りの充実も欠かせないのではないだろうか。いわゆるメタ認知能力を高めていくことが大切であると考えられる。

下の写真は、単元の終末に子どもたちが学習を振り返る自己評価シートの例である。単元での学びを数値と文章で自己評価することで、自分のよく理解できている点を意欲や自信につなげたり、努力を要する点を捉えて自らの学び方の改善につなげたりして、次の単元への学びにつなげていくことができるであろう。また、教師にとっても、これらのシートを見返すことによって、自らの授業改善につなげていくこともできるであろう。

単元学習振り返りシート

名前()

①整数と小数のしくみをまとめよう

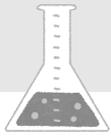
①楽しく学習することができましたか?	4	3	2	1
②学習内容を正しく理解することができましたか?	4	3	2	1
③学習したことを、他教科やふだんの生活にも生かすことができそうですか?	4	3	2	1
④おもしろい問題でも、ねばり強く取り組むことができましたか?	4	3	2	1
⑤目標を立てて取り組み、どんなことを学んだか振り返っていましたか?	4	3	2	1

★この単元の学習で、自分が頑張ったことやできるようになったこと、もう少し頑張った方がよかったことや、むずかしかったことなどを文章で書いて、振り返りましょう。

【振り返りシートの例】

理科

主体的に学び、知識を生かして表現することができる指導の工夫



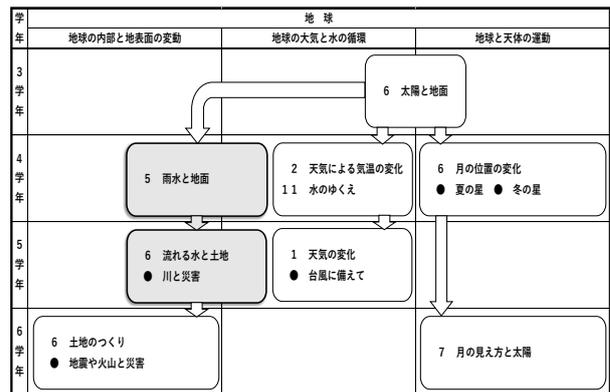
大樹町立大樹小学校 教諭 城石 博康

POINT 1 系統表で学習の見通しをもち、見方・考え方を意識できる授業展開

子どもたちが自ら考え主体的に学ぶことができるようにするためには、教科書の解説編や学習指導要領解説などにある系統表を活用することが有効であろう。系統表には、3学年から6学年までの学習内容の領域や、関連について図解されている。それにより、既習の単元を生かして考えればよいと気付くことができるであろう。

また、その単元や学年と関連する「見方・考え方」を確認していくことも重要だと考える。子どもたちが働かせる「見方・考え方」を知ること、どのように自然の事物・現象を捉えたり、問題解決の過程で考えたりしていけばよいのかの見通しをもつこともできると思われる。

このように、これから学ぶ単元と既習の単元とのつながりや、「見方・考え方」を子どもと共有することで、理科の学習への興味・関心を高め、自ら考え主体的に学ぶ子が育つであろう。



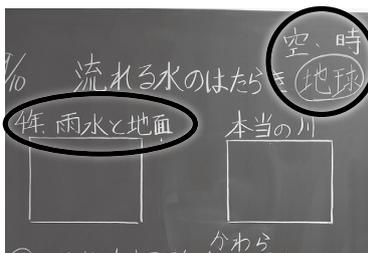
【5 学年理科 「地球」領域の系統表】

領域	領域ごとの特徴的な「見方」
エネルギー	主として「量的・関係的」な視点
粒子	主として「質的・実体的」な視点
生命	主として「共通性・多様性」の視点
地球	主として「時間的・空間的」な視点

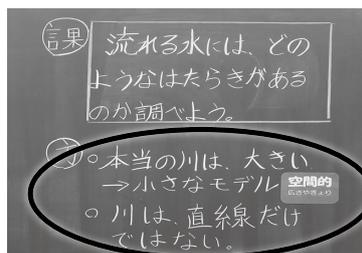
学年	学年ごとに重視したい「考え方」
3 学年	「比較する」
4 学年	「関連付ける」
5 学年	「条件を制御する」
6 学年	「多面的に考える」

【理科の見方・考え方】

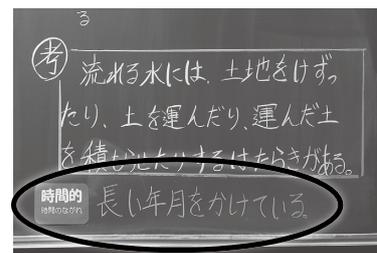
① 「地球」領域なので、主として「時間的・空間的」な視点で捉える。さらに、4 学年の「雨水と地面」の学習と関連があり、既習事項を活用して考える。



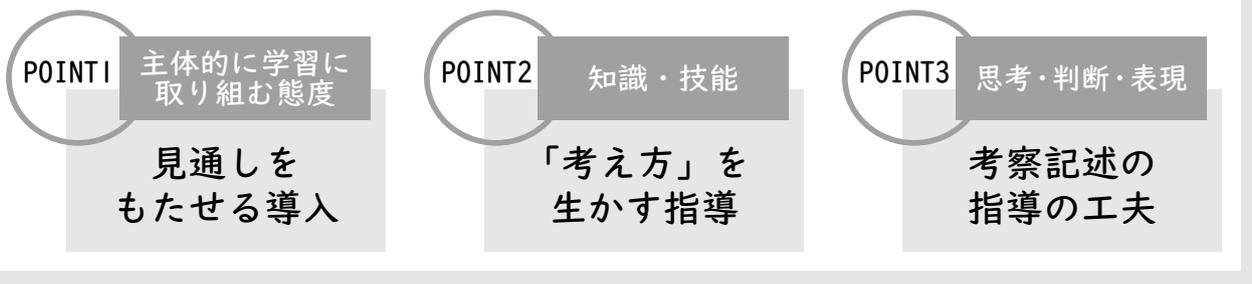
② 「空間的」な視点の確認。実際の川は数10kmにもなり、多くの町を通るが、授業では小さな川のモデルを用いることを共通理解する。



③ 「時間的」な視点の確認。地球が長い年月を掛けて変化していることを理解できるようにする。



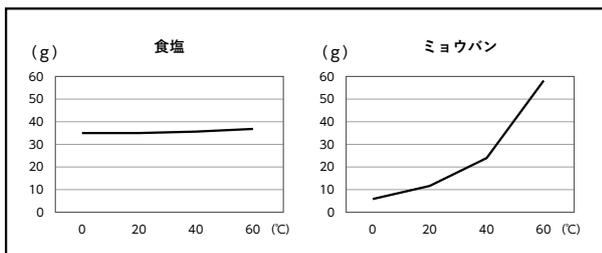
【「流れる水と土地」の授業の流れ】



POINT 2 「考え方」を生かしたグラフの読み取り方の指導の工夫

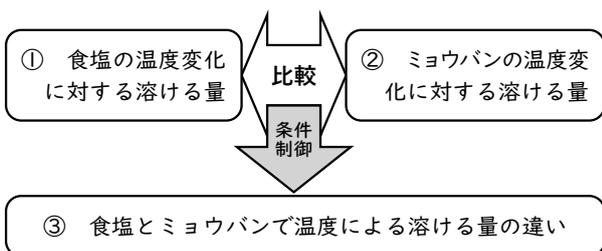
理科の学習では、グラフが多く使われる。そこで、グラフを正しく読むために、何を読み取るのかを意識することが大切であろう。このときに、「考え方」を生かして読み取ることで必要な情報を得ることができると考える。

例えば、「もののとけ方」の学習では、「温度ととける量」のグラフが出てくる。



【100 mLの水に溶ける食塩とミョウバンの量】

このグラフでは、



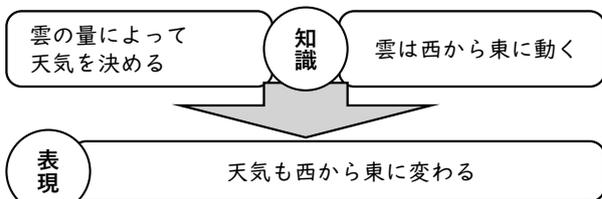
このように3つの情報が出てくる。この中の2つの情報を取り出し、3学年でも重視され、理科の考え方の基本となる「比較」も働かせることで、新たな情報を見付け出し、複合的に考えていくことが必要となると考えられる。

グラフの読み取りにも「考え方」を生かすことで、多数の情報から自分の必要な情報を見付け、グラフを適切に読み取ることができよう。

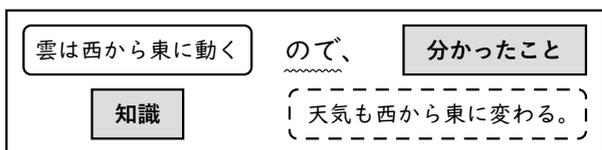
POINT 3 考察等の書き方の定着に向けた教科書の効果的な活用の工夫

学習指導要領では「理解していること・できることをどう使うか（思考力、判断力、表現力等）」が重視され、考えたことや実験の過程を文章で表すことが求められている。

例えば、「天気の変化」の学習では、子どもたちが個別の知識を獲得しているが、どのように文章に表してよいのか分からないというケースがあると思われる。そこで、個別の知識を関連づけたり組み合わせたりしながら、文章に適切に表すことができるように、指導を丁寧にしていくことが大切だと考える。



授業の考察や振り返りで文章に表すときには、「**知識** + ので + **分かったこと**」の型にすることで、整理した文章を書くことができるのではないだろうか。



また、教科書の単元末にある問題を活用することで、問いに対してどのように記述すればよいのかを考えることにつながり、思考が深まってくるのではないだろうか。

これらを繰り返し取り組むことで、考えを文章で記述することに慣れていくと考える。



POINT
1

Small Talkを通して、 語彙力を高める

昨年度から小学校高学年で外国語が教科化されたことを受けて、これまで使用してきた文部科学省のテキストから初の検定教科書に替わり、指導する教師も試行錯誤の一年となったのではないだろうか。そんな中、標準学力検査C R Tにも初めて英語が追加された。初の小学校外国語科のテストであり、内容や難易度に多少の不安があったと思われる。日々、外国語科・外国語活動の授業に真摯に向き合い、熱意あふれる指導にご尽力いただいている先生方に敬意を表したい。

以前より重要視されてきた Small Talk について、より充実した指導となるよう、具体的な

指導例を紹介したい。

文部科学省から発行されている「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」には、Small Talk は2時間に1回程度行うものとして設定されており、5学年ではインプット中心、6学年からはペアで伝え合うことを中心に行うと記されている。

ONE WORLD Smiles では、指導書に Small Talk の活動が組み込まれている。

このような活動こそ、教科書では学習しない新しい語彙に触れる絶好の機会だと考える。Small Talk の活動を充実させることで、語彙力や未習単語への興味・関心を高めることができるであろう。



【指導例】

① 導入

5学年では、身近な事柄について主に子ども同士がやり取りをする。自分自身の考えや気持ちを楽しみながら伝え合う中で、既習の表現を繰り返し使用する機会を設定し、定着を図る。4学年で取り組んだ自己紹介の表現を思い出しながら、子ども同士でやり取りできるようにする。

② 1回目の対話後で指導すること

「既習単語を想起できるようにする」

1回目の対話を行った後、子どもが伝えたくても英語で表現できなかったことはなかったかを確認する。このとき、学級全体に問うことで、既習単語の想起を促すことにつながるであろう。また、感想が言えたのか、対話を続けることができたのかを子どもが自ら振り返ることができるように考える。

Small Talk 導入例

Lesson1 Nice to meet you.
S1 : What animals do you like?
S2 : I like cats.
S2 : That's nice. Why?
S2 : They're cute. How about you?
What animals do you like?

1回目の対話後の指導例

T : Do you have any questions?
S3 : ウサギが好きって言いたい。
T : ウサギ、誰か覚えている？
3年生のUnit 9で学習したね。
S4 : Rabbits !

POINT1

知識・技能

Small Talkを生かす

POINT2

思考・判断・表現

語順を意識する

POINT
2

語順を視覚化し 意識できるようにする実践

学習指導要領の小学校5学年及び6学年の外国語の思考力、判断力、表現力等の目標では、「コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う」とある。

この「語順を意識させる」ための実践を紹介したい。

1 Back chaining と Finger drill

一度聞いただけでは繰り返せないような長めの文章を言わせたいときに使う指導法。

I want an amusement park.



小指から順に指さしながら、「I want an amusement park.」と言い、どの指が、どの単語を表すかを視覚化する。

(1) Back chaining

Back chaining は、後ろからつなげるという意味なので、親指を指さして「park.」。その次に人差し指と親指を順に指さして「amusement park」と、どんな順序で、

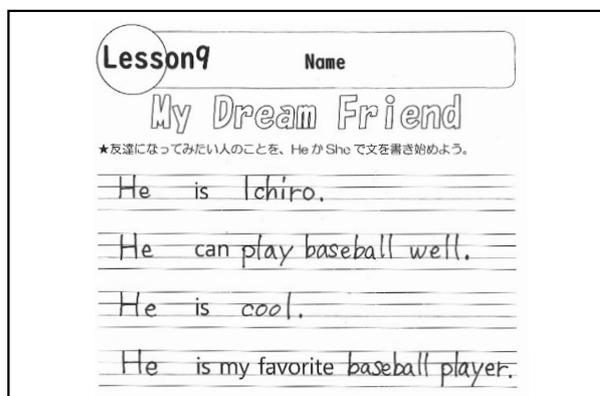
一語一語が並んでいるかを視覚的に意識させることができる。

(2) Finger drill

Finger drill では、小指から順番に、一語ずつ聞いた後、「What's this?」とランダムに指し示した場所の単語は何なのかを答える。

2 ワークシートに書き写す

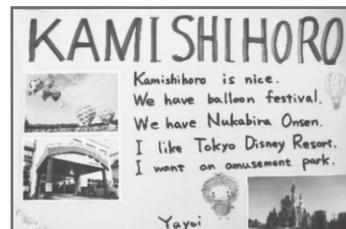
十分に音声で慣れ親しんだ上で、ワークシートに書き写す。その際、子ども自身がスペルを間違わないようにして、語順を意識できるようにしたい。



【ワークシートの例】

3 ポスターを作成する

ポスターを作成し、子ども同士がお互いの書いたものを見合う時間をつくる。友達のものを見たり、自分のものと比べたりしながら、子どもたちは英文を書くときに、どんなことに気を付けたらよいか（語順、符号の使い方、語と語の区切りなど）に注意して書くことに気付くであろう。



【ポスターの作品例】